



月報

# 岡崎の教育

12月号

昭和61年12月1日

発行／編集

岡崎市教育委員会

桑谷山に日が昇る  
子供たちの希望とともに

そのやわらかな光を  
いっぱい浴びて  
はしやぎまわる  
元気な子供たち

春の山は「おぼろ月夜」  
夏の山は荒々しい雲をよぶ  
秋の山は「もみじ」の歌  
冬の山は強い風をうけとめる

素晴らしい自然  
子供たちは  
真っ白いページに  
自分の思い出を  
ていねいに書き込んでいく

〈心豊かに〉



(みんなのれるよ — 竜谷小)

吾は人間我も人の子。同じ動物でも四つ足でない。人間である。人は唯一人では生きられない。多くの人や物にささえられ生かされることに依つて生きています。その恩に報いる唯一の道は、人を生かし物を生かすことである。

人の此の世に生まるるは、宿業を因とし、父母を縁とせりと経文の中にも書かれています。

ところで、宗教とは宇宙の示す教えで



あり「教」の源は「孝」である。真面目な孝行の実践こそ人の踏むべき道である。

東洋のお釈迦様も、西洋のキリスト様も、善をなし悪をなすことなかれと言いつつ残して居られる。聖人の説かれた教えが法として伝えられ、人として神仏の如き理想に近づくと精進努力して生き続ける人々もいる。

楠正成公が旗印に「非理法権天」の五

文字を用い宜揚された。大楠公の菊水定紋にふさわしく自然である。理は法に非ず、法は権に非ず、権は天に非ず、天は理に非ず、実に自然である。熟慮断行。暴走は禁物。人生七転八起結果自然成。自然に背かずさからわれないのが天然である。生きている限り息づまっつては終りだ。道もつまれば行き止まりで前進できない。腹が張る。通じがなくなれば糞つまりで便秘となる。苦しい。つまらない

— 教育随想 —

# 人生処世の一言

池田芳俊

ので幸せだ。無理のない自然のあり方こそ幸せだろう。

道元禪師は「教えを行じて、法に依つて自覚し、覚悟して実行し、自信を得たら覚他せよ。」と坐禅を導かれた。一人よがりの悟りでは駄目だ。自己と他己の自他共に平等の覚りこそ本當の証りで大切だと説かれた。

現今の日本は、人も多く、物も豊かなり過ぎて、心と物との均衡が得られな

い時代だと思われる。心が定まらず、物の有難さを知らず、その恩恵すら感じなくなっている。「吾唯足知」故人の銘言も忘却された感じの現社会ではなからうか。学校教育も、社会教育も、家庭教育も、宗教教育もすべて密接に関連していると考ええる。

親孝行したい時には親はなし。後悔しないよう要心、用心、御要鎮。

今日のおちかい

- 一 きちんと坐つて手を合わせ静かに息をととのえよう
  - 二 うそをつかず話し合い
  - 三 心と心を かよわせよう
  - 四 今日がよい日であるように力いっぱいがんばろう
  - 五 不平をいわず 欲ばらず たいがい明るく ありがとう ささえあつて この世界
  - 六 やさしい気持を だれにでも すべてごぞんじの神仏
- 真理のみちに めざめよう
- 人が世に処するには、過去を顧みて現在にむち打ち全力投球し、精進に努めてこそ充実した生活が得られるものである。人として心も身もすつきりとした整調された人間感覚になり切り、生命の実相を把握した者こそすばらしい。
- 生死事大、大死一番、無常迅速。生きける間に解脱したいものだ。
- (竜海院住職)



生徒の意欲を引き出す助言を!

技術・家庭科指導員  
清水 厚治

「やったあ。」

数分前まで、渋面を作っていた生徒が瞳を輝かして、小さくつぶやいた。

A校でのトランジスタを用いた発振回路の製作実習をする授業で出会った心に残る生徒の表情である。

スピーカーから「ピヨツ、ピヨツ、ピッ」と小鳥の鳴くような音が出ている。音が出る度に、表情の和むのがわかる。

この喜びを与えたのは、教師の、「脚がおかしいなあ。」(トランジスタの)の一言だ。その数分後に、思わず咬いた言葉が、生徒の気持ちを十分にあらわしている。

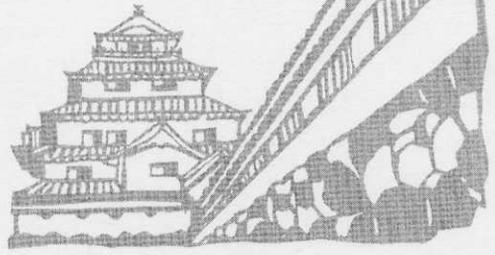
机間巡視にも最大の注意を払い、悩み苦しんでいる生徒を発見し、その原因をつきとめ、さりげなく助言を与えた先生に「さすがあ。」の思いを新たにしたい。

「教えてもらって、出来た。」という感じを持つのと、

「自分の力でなしとげた」と感じるのでは

ふるさとシリーズ

— この人に聞く —



# 岡崎の第九

吉見 光三氏

「今年は、三五〇人も第九を歌いたいと応募してきてくれました。岡崎に第九が根をおろしたと言えるのではないでしようか。」

十年間とだえていた岡崎の第九を復活させ、今年で四回目の演奏を迎える先生は、こううれしそうに話される。取材は土曜日の夜の練習の合間をぬっておこなわれた。

ベートーベンの第九シンフォニーといえば、今では、アマ、プロを問わず年末に恒例化した感はあるが、アマチュアの第九は、なかなかその地域に定着しないものである。岡崎で年々会員が増え続け

ているのは、何か先生に特別の指導法があるのか同う。

「指導スタッフがしっかりしているんですよ。みんなでやるのが岡崎の特長なんです。」

岡崎の第九をささえているのは、一個人ではなく、「みんなの力」なのだということを強調された。

ニユーススタッフは、練習がおわると残って次回の取材について話し合い次の練習時にはニユースが配られる。学習コーナーではドイツ語の練習がおこなわれる。パートリーダーは歌のとりまとめだけではなく、なやみ相談まで引き受けているときく。出席をとる係、休み時間にアメを配る係など、一人一役という感じで、「みんなの合唱団」であることを意識づけてきている。

前回の第九（昭和六十年）について、指揮者の外山雄三氏は、

「岡崎の第九は、青年のような第九だった。若々しい演奏だ。」と評されたときく。

実際に先生が指導されている練習を見せていただく。

練習に対する先生の姿勢は、非常にきびしい。ドイツ語のちよつとした発音ミスもききのがさずにくり返し練習する。

しかし、このきびしさは、「うまくなるための」練習ではなく、「みんなで歌うことを楽しくするための」練習なのだということ力を説かれた言葉が印象にのこる。きびしいことは飛ばけれども、先生の目は暖かい。

「ぼくはね、何よりも家庭的な雰囲気大切にしているんですよ。」

この言葉が第九の演奏にそのままうつけ込められているように感じた。

昨年の演奏をきいた観客の一人が、「音楽の内容のどうのかわからないが、これは聴く音楽というより、歌う側の音楽ですね。」

と感想をいわれた言葉が、岡崎の第九の性格をよく言いあらわしているといえるのではなからうか。

「歓喜の歌」のすばらしい合唱のひびきを背にうけて、取材班一同も何か温かい贈り物を受け取った時のような気分をあげわいながら帰路についた。

生年月日 昭和二十一年十月十二日  
住所 細川町字鳥ヶ根一―一五五



は大きな差がある。

成就感を奪わない助言こそ、生徒の意欲と満足感を結ぶ糸であり、次への挑戦をかりたてる真の助言だと思ふ。

## 繰り返しと新しい活動と

特殊教育指導員

渡辺 勝英

M校で「ボールを使った遊び」の授業を参観した。

体育館の床に大きなかごを置き、一メートルほど離れた所からボールを投げ入れ、次の人にタッチするリレーである。一、二回試みるとすぐにボールが入る大きさかごなので喜んで取り組んでいた。リレーを繰り返すにつれ、自分の入れるボールを片手に、前走者の帰りを待つようになった。

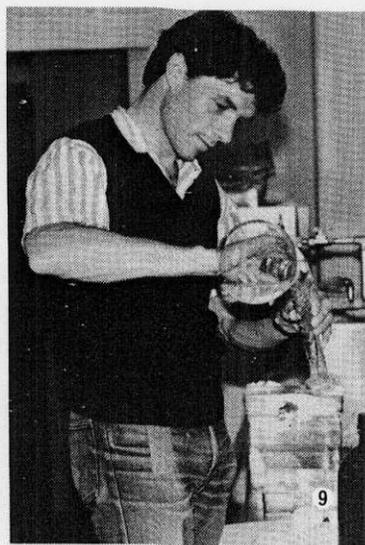
次にかごが天井につるされた。リレーのやり方は覚えてきたし、かごを前方から上方に移しただけなので、今のこの子たちならきつとできると判断されたからであろう。先生の判断は的確で子どもたちは意欲を新たにしてい取り組んだ。両手を上に伸ばすのに抵抗を示していた子どもをあげて両手を精一杯伸ばしてボールを入れようとして懸命だった。

特殊学級の授業では、学習活動を遊戯化し、繰り返しながら徐々に新しい活動を組み入れることが大切である。このようなかで、主体的に生き生きと取り組む姿勢が子どもに生まれてくるのではないかと考えている。

## 岡崎再見

58

## 基礎生物学研究所



今回は前号に続き「岡崎国立共同研究機構」を取り上げ、その中の基礎生物学研究所を訪れた。

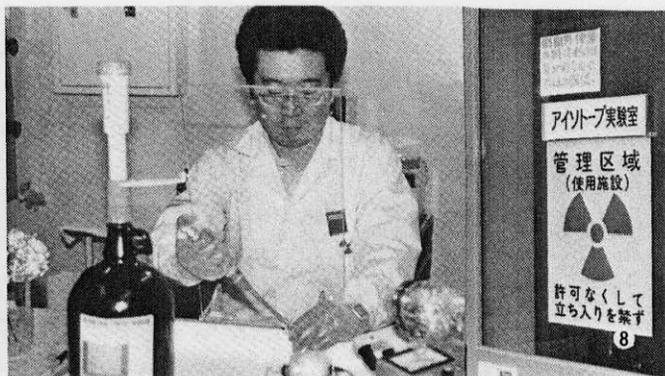
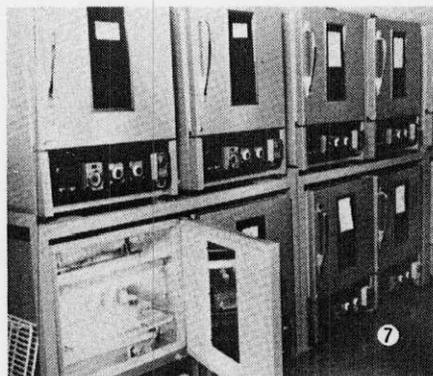
基礎生物学研究所は、学芸大学の階段教室のあった位置に立派な姿を誇っていた。

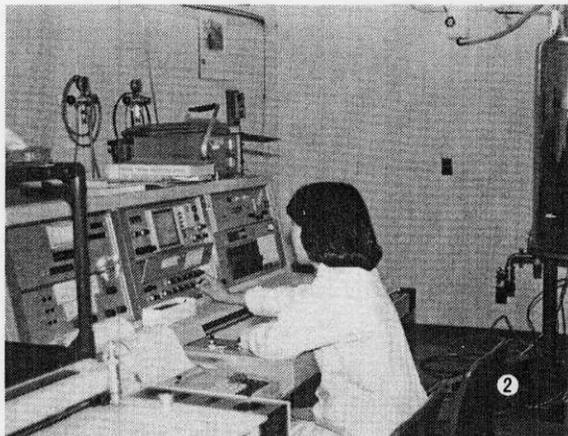
発生生物学の江口研究主幹、技術課本多課長のお二人に案内され研究所の中を見せていただいたり、基礎生物学研究所のアウトラインを紹介するVTRを見せいただいたりした。

生物たちとその生きざまを正しく理解し、人間と生物たちが如何に係わり合っているかを知ることが、人類の将来にとって最も大切なのだと強調された。

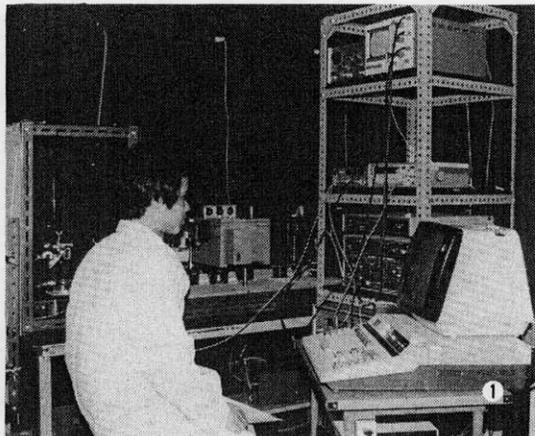
ここでは、実験生物学を三つの大きな柱にして研究を進めている。一つは、生物の生きる単位である細胞のからくりを調べる細胞の研究。二つは、受精したひとつの細胞から生まれる生物。その受精にいたる生殖のしくみや生物のからだ作り出されるからくりを探る発生の研究。三つは、環境に適した生き方をする生物がどのようにして環境を知り、生き方を調節するかを調べる制御の研究である。

研究室で真摯に実験と取り組む研究者の姿に、やがてこの研究所からすばらしい成果が生まれるだろうと胸が高鳴ると同時に頭の下がる思いがした。





2

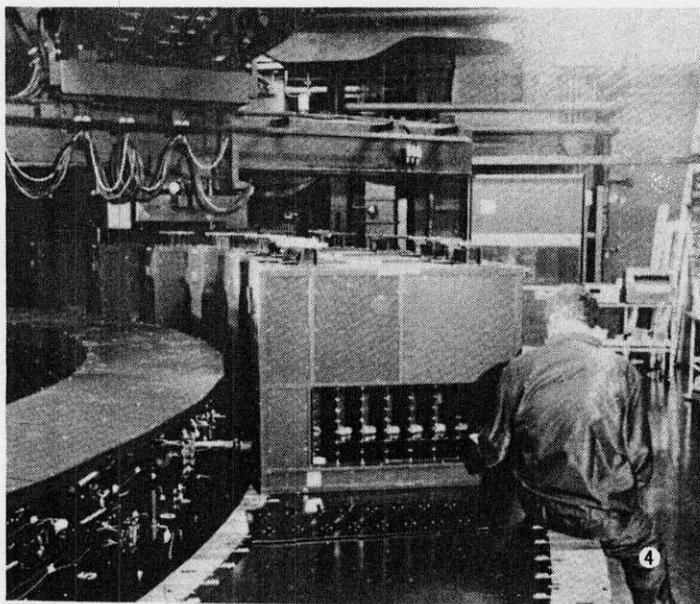


1



3

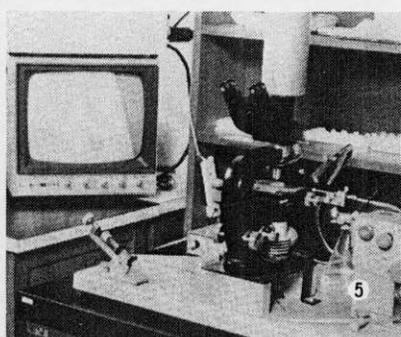
- ① 光合成色素のスペクトル分析を行なうための、分光システム
- ② 生体成分の分析や代謝の研究を行なう熱伝導磁気共鳴装置
- ③ 細胞に外来遺伝子を注入するための特殊顕微鏡
- ④ 生命現象の光による調節の仕組みの研究をする世界最大の大規模ロググラフ
- ⑤ 水生動物室で飼育されるイトマキヒトデ
- ⑥ 卵内に種々の物資を注入する テレビカメラ付き微小注射装置
- ⑦ 実験生物を 光・温度条件についての厳密なプログラムに従って育成する人工気象室
- ⑧ 基礎生物学及び生理学が共同利用するアイソトープ（放射性同位元素）実験室
- ⑨ 国際的な学术交流の一端として研究に励む外国人研究者



4



6



5

## 調べるの大好き

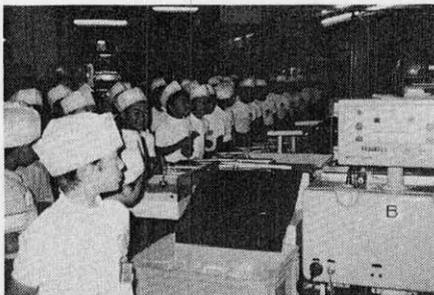
細川小 本澤寿美子

「わたしたちのジャージは、大きき別に並べて売っています。服は、しわにならないうようにハンガーにかけて……」

自分の調べてきたものをもとに、TPPを使って意見を発表する。子ども達が生き生きとしてくる時である。秘密の箱にいつぱいつめてきたひとり調べを、友達にわかってもらおうと一生懸命なのだ。

できるだけ身近な地域教材を取り上げ、子ども達が進んで調べられる社会科学学習と心がけてきた。

地図を持って学校の回りを歩



く。時々止まって地図で確かめる。子ども達を集めて話をする。高台に登って観察をする。わからない時は、何度も調べ直す。「先生、また歩いて行くの。」

とN子の声。おとなしくあまり外で遊ばないN子にとつて、歩いての見学は苦手なようだった。

学校の東側の様子を観察し、続いて西側の様子。四月の社会科学の授業と言えば、見学カードを持って外を歩くことだった。

そんな単元のまとめに、N子は「細川つてさかがいっぱいあって、歩くのがたいへんです。社会はいやだな。」

と書いていた。

六月のみそ工場の見学。七月のみそ工場の見学に続いて、九月は近くの商店を調べた。全員で洋品店を見学。しかし、これだけでは子ども達の疑問を解決するのに不十分である。そこで、授業後、グループを作つて商店調べをすることにした。それぞれ自分が調べたい商店に行き、見たり聞いたりした。子ども達のエネルギーはすばらしい。一軒でだめなら、次の店へとさらに調べを深めていくのである。N子は店の様子、売っている物、開店した年、サービスなどのひとり調べに加えて、

「お店の人は、十円足らなかつた子に『いいよ。おまけしあげる』って言っていました。調べるっておもしろい。」と書いています。

ひとり調べの秘密の箱をふくらませる、ひとりひとりの調べ学習をより充実させていくことによつて、N子のような子がたくさん出てくれればと思う。

## 教育日々



### 理解への確かな一歩

東海中 大久保幾三

初対面の生徒どうしが、はたして騎馬にスムーズに乗つて走れるものだろうか。女子の車いすを男子が抵抗なく押していけるものだろうか。それより以前に、はたして笑顔で養護学校の生徒達を迎えられるものだろうか。

か。

岡崎養護学校と東海中学校の初めての交流学習を前に、わたし達教師は、大きな不安を抱いていた。もちろん、事前に岡崎養護学校の先生方との打ち合わせもした。交流委員の生徒達とも歓迎のしかたを話し合った。準備もした。教室で交流学習の意義も話してきた。それでも、いくつかの心配は残つたままであった。

九月二十五日、午前十時。進入路の坂を登るバスのエンジン音が響いた。そして、バスの赤い車体が運動場に止まった。今や遅しと待ち構えていた東中生は、(さあ、今から始まるぞ)と、色めき立った。

ところが、バスからは大人ばかりは降りて来ても、かんじんの生徒達は降りて来ない。

やがて、車いすが二台、三台と降ろされる。バスの中でのゆっくりとした人影の動きに続き、やっと岡養生たちが降りて来た。先生方にかかえられるようにして下車する生徒もいる。

東中生の多くは、バスが着きさえすれば、すぐにでも交流会が始まるものと思っていた。中には、二キロの距離をバスに乗って来られていいなと思ってい

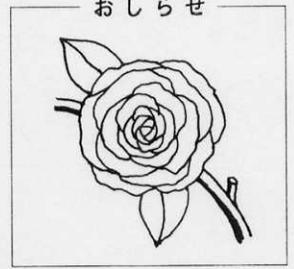
た生徒もいたのである。バスが着いてからおよそ二十分で、岡養生が運動場にそろつた。東中生に予想もできなかったこの二十分間こそが理解の出発点だと思つた。

交流が始まってからは、実に楽しく会が進んだ。東中生の作つたどの騎馬も、くずしてはたいへんと必死に走る。上に乗つた岡養生もしつかりつかまりゴールをめざす。当初のわたし達の心配は全く杞憂に終わった。「先生。今度は教室でゆっくり交流会やらせてえ。」

こう言いながら、動きかけたバスの方へ走り寄つて手を振っている生徒達。この姿を見て、交流の確かな第一歩を踏み出した思いを味わつた。



おしらせ



【寄贈刊物・資料等】

◆井田の塔 第13集 井田小 B5 一八ページ

◆太陽と土に親しみ自ら励む子の育成ー体育学習ー B5 五四ページ 井田小

◆玄々斎宗室生誕碑建立記念誌 B5 八一ページ

玄々斎宗室顕彰会事務局

◆調和のとれた発達をめざす学習指導ー国語・算数・体育科に着目してー 六南小 B5 九六ページ

◆文集六南子 六南小 B5 一六六ページ

を学び、ホテルの幼虫を人工飼育。絶滅状態だった生田ボタルを復活させた」

▽岡崎市スクールバンド協議会

代表 太田清美 葵中学校長

「吹奏楽部を持つ市内の学校が集まって昭和三十六年に結成。現在、小学校四校、中学校十三校、高等学校九校の児童・生徒約千人が加盟。市制記念日、おかげさきつ子展など各種行事に出場して地域の音楽文化活動の中心的役割を果たした」

■西三河中学校長距離継走大会

竜海中男子チームが準優勝

去る十一月二十二日、西三河中学校長距離継走大会が県営岡崎グラウンドで開催された。その結果、本市関係入賞校は次の通りである。

（男子）

・準優勝 竜海中学校

・四位 東海中学校

・八位 甲山中学校

（女子）

・五位 竜海中学校

・十位 矢作北中学校

※前記、男子三チーム、女子二チームについては、十二月二十五日、長久手青少年公園で開催される県大会に出場する。上位入賞めざしての力走が期待される。

■市民マラソン大会小中学校の結果

昭和六十一年度岡崎市民マラソン大会が、去る十一月二十三日、県営岡崎グラウンドで実施された。小中学校関係三位までの入賞者は次の通りである。

（小学校）

男子一位 木本将司（本宿小）

男子二位 永田俊幸（北野小）

男子三位 大久保和則（岡崎小）

女子一位 角田葉子（大樹寺小）

女子二位 山内いその（天樹寺小）

女子三位 鈴木純恵（北野小）

（中学校）

男子一位 神谷隆章（城北中）

男子二位 青山豊久（東海中）

男子三位 光岡弘勝（城北中）

女子一位 井上雅子（竜海中）

女子二位 倉橋智子（竜海中）

女子三位 青山まさ子（美川中）

第13回 冬季研修会

◇期日 昭和61年12月25・26日

◇場所 岡崎市少年自然の家

◇講師と演題

（第一日）

・「これからの生き方教え方」

ー金八先生を通してー

作家 小山内美江子氏

・「日本文化の源流をめぐって」

ー照葉樹林文化とー

ナラ林文化ー

国立民族学博物館第二研究室 佐々木高明氏

・「今日の社会におけるマスコミの役割」

中日新聞論説委員

前田 弘司氏

・「このごろ思うこと」

前岡崎市教育長

鈴木 正弘氏

（第二日）

・「あたりまえのこと」

元岡崎市中学校長

小笠原健治氏

・「今の教育に求めるもの」

お茶の水女子大学教授

外山滋比古氏

・「伝記の世界に生きる人」

作家 小島 直記氏

第十四回岡崎市教育文化賞

加藤・青山両氏と三団体

地域の教育文化振興に貢献した個人や団体を顕彰する岡崎市教育文化賞授賞式が、去る十一月十五日、せきれいホールにおいて実施された。

本年度は、個人九人と団体十四の推薦があった。審査の結果次の個人二人と三団体が選ばれ受賞の栄に輝いた。

個人

▽加藤正男氏（55歳）

岡崎市明大寺町坂下五の六二「米国ニューポートビーチ市との姉妹都市提携調査委員会の代表を務め、姉妹都市縁結びに活躍。中学生の海外派遣にあたっては、現地の知人を通じてホームステイの家庭を紹介するなど国際交流活動に貢献」

団体

▽能見神明宮

岡崎市元能見町四二

代表 齊藤光久 宮司

「承久三年（一二二二）の創建と伝えられ、古い歴史を持つ祭礼の渡御・山車宮入りの行事を継承」

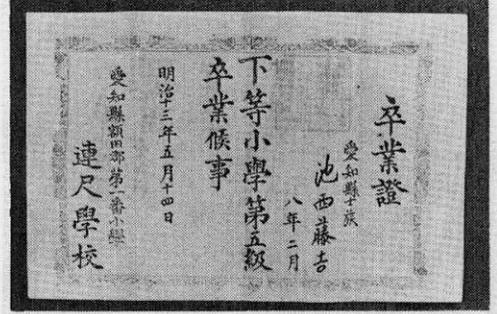
▽美合小学校ホタルクラブ

代表 大沢年男 君

「昭和五十二年四月に発足。河合中学校からホタル養殖の技術

# 泉

## 明治の卒業証書



大平町辻重 河合澄江氏蔵

岡崎市の郷土館には明治十一年からの卒業証書が展示されている。

郷土館の証書には「愛知県」「平民」と書き加えられている。しかし、写真の卒業証書には、「士族」と書かれ、当時平民と士族の区別がこのようなところにも明記されていた。

明治五年に学制がしかれて間もない頃の卒業証書は、現在の修了証書にあたるもので、級があるごとに、年に二回発行されていたようである。同氏の前年四月一日付の卒業証書も残さ

れているが、そこには「第七級卒業候事」とある。不思議なことに校名が「愛知縣額田郡第一番小学連尺學校」となっている。

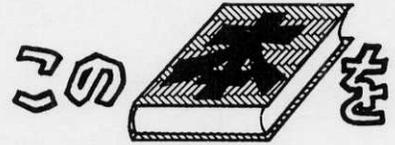
当時、第一番小学といえは岡崎学校（現在の梅園小学校）のはずである。「岡崎教育史要」の校名変遷

系統図によれば、大樹寺小学校の前身広元学校が明治十一年には第五番小学であったものが、明治十三年には第十七・十八番小学と改称されているので、この頃、小学の改編がおこなわれたのであろう。

●カ  
ツ  
ト

矢東小

野々山 勝 彦



- \*板前の気概 西中熊一 ￥1200  
リオン社
- \*父よあなたは強かった 河崎義祐 ￥1200  
PHP 研究所
- \*ことばの饗宴 岩波文庫編集部 ￥300  
岩波書店
- \*自己発見としての人生 山崎正和 ￥1200  
TBSブリタニカ

※ロシアについて 司馬遼太郎 ￥1200  
文藝春秋  
ロシアが関係する二つの作品「坂の上の雲」「菜の花の沖」を書くために十数年もロシアについて考えるはめになった。ロシアが好きでも嫌いでもない。反ソ主義者でもない。ましてその逆でもない。歴史という大きなわくの中で日本とのかかりにおけるロシアを見たかっただけであると著者は述べる。  
長年ロシアに対して深い関心を持ち続けた著者が、主に日露関係史を煮つめることによってロシア像を抽出する。

落葉を掃き終えて、ほつとする間もなく吹き抜ける風に追われるように木の葉が校庭を舞って行く。色づいた葉を集めて大事そうに教室に持って来る子供達。「山がきれいだよ。山は歩けないから、『見て、見て』といっているみたい」と、日記に書いて来たI子の感動を大切にしたいと思う。

師走といえば「第九」。岡崎でも年末に市民参加の第九が演奏される。今回、その合唱指揮者を取材し、練習を聴いたある編集者の感想。「音のうずに圧倒された。感動の一語。本番は、是非聴きに行きたい。」  
第九は、日本人の精神性にマッチした魅力つきない名曲といえよう。



秋も深まった一日、岡崎国立共同研究機構の一つ基礎生物学研究所を訪れる。何十という水槽にヒトデがいた。食欲をそそる大きな伊勢海老やウニがいた。それらの卵に物質を注入して、細胞の分裂増殖の分子機構を探るといふ。  
何やらわからない機械を操作する人達が若いのに驚く。

鈴の音を響かせて、トナカイが走り、サンタクロースがやってくるといわれるクリスマスアイブ。  
欧米諸国で行われた行事が、日本の年中行事の一つとして定着したかに見える。しかし、子供たちは、夢を運んできてくれるサンタクロースの本物の物語を知っているのだろうか。にぎにぎしい宣伝に乗せられているように思うが……。